

# 椋鳩十賞（小学校1・2年の部）

「ぷりぷりぼうのおこりんぼう」 理論社

安曇野市立明南小学校 2年

しおざわ ここな  
塩沢 心菜

ぷりぷりぼうのおこりんぼうを読んで

この本は、いのししのお話でした。ドキドキするお話です。

おかあさんのししのお話を聞かなかった子どもいしがいました。その子どものせいで、二ひきの犬をつれたりょうしが近づいて来ました。おかあさんのししは、子どもいしを木のかげにおしこんで、そこは、ほんたいの方こうににげていきました。それをじつと見つめていた子どもいしは、はじめておかあさんのししの気もちがわかったというお話でした。

おかあさんのししにおこことを言われたから、子どもいしが、「そんなにやかましく言うのなら、おかあさんのししをこまらしてやろう。」と思った子どもいしの気もちは、わたしもわかります。きっと、わたしもにているようなことをしてしまうと思います。

近づいてくるりょうしから子どもたちをまもらなくてはと思ったおかあさんのししの気もちが、読んでいるあいだよくかんじられました。

ほかのところにかくれた四ひきの子どもたちが、りょうしにうたれていないかしんぱいです。その子どもたちをかくして、言うことを聞かない子どもをたすけに行くおかあさんをどう思っているのか気になります。すごくこわかったかもしれないし、わたしたちをおいていかないでと思ったり、言うことを聞かない子どもいしにして言うことを聞いていけば、ぶじでいられるのと思ってしまうかもしれません。

お話のさいごで、子どもいしは、おかあさんのししの気もちがわかったけれど、もうちょっと早くから言うことをきけていればよかったなと思いました。おかあさんが、にげていたところでお話がおわっているの、どうなってしまうたかしんぱいでなみだがたくさんでました。

ぶじに子どもたちのところにもどってきてほしいです。

人間もどうぶつも、おやは、いつも子どものことを考えているんだなと思いました。

パパとママは、おかあさんのししみたいな目にあってほしくありません。



#### 【講評】

心菜さんは「子どもいのししが『そんなにやかましく言うのなら、おかあさんいのししをこまらしてやろう。』と思った子どもいのししの気持ちはわたしもわかります。」と、まず子どもいのししの気持ちに共感しています。それと「近づいてくるりょうしから子どもたちをまもらなくてはと思ったおかあさんいのししの気もちが読んでいるあいだよくかんじられました。」とお母さんいのししが子どもを心配する気持ちも感じ取っています。子どもの気持ちだけでなく、おかあさんの気持ちまで想像して豊かな読みをしています。このお話はお母さんいのししが最後にどうなるかを書いてありません。心菜さんは「しんぱいでなみだがたくさんでました」と、お話に浸りこんで読んでいた様子が伝わってきました。最後には、「人間もどうぶつも、おやはいつも子どものことを考えているんだなと思いました。」とまとめ、親が子どもに寄せる強い愛情を読み深めています。

(中原 秀樹)

## 棕鳩十賞（小学校3・4年の部）

「母グマ子グマ」 理論社

喬木村立喬木第一小学校 3年

やまこし ほの  
山越 穂乃

### 「母グマ子グマ」を読んで

このお話は、二ひきの子グマのことを母グマがさい後までまもろうとするお話です。この母グマは、今までにもかりゆうどやかり犬にいくどもやられて、体にはそのときのきずがたくさんのこっぺにいます。それでもまげずに山でくらす母グマは、この山の中では強く大きなクマでした。

春になって春のおいをかぐと、母グマと子グマは、目をさました。春のおいで目をさますクマは、とてもながいんだなと思いました。はなのいいクマなので、おいしい食べもののおいもすぐに分かります。食べものだけではなく、人間やかり犬のおいもすぐに分かることができます。目がさめてすぐに、犬のおいが分かった母グマは二ひきの子グマをつれてにげようと思いました。このときから母グマは子グマのことを考え

ていたのです。それでもなかなか動かない子グマに、その場でまってるようつたえ、母グマは、自分から犬たちのところへむかっていきました。今までにもたくさんかり犬にかまれていた母グマ。わたしならこわくて行けません。母グマも本当は、こわかったんだと思います。それでも子グマをたすけたいという気持ちがわたしにもつたわってきました。たくさん走ってへとへとになった母グマに犬たちがかみついたのです。なにもわるいことをしていないのに、なんでこんなひどいめにあわなきゃいけないんだろうと悲しい気持ちになりました。かりゆうども同じです。なにもしていないクマたちを、じゆうでうつなんて、どうしてそんなひどいことができるんだろうと思いました。

そして、犬にやられながらも、さいこの力をふりしぼって子グマのところへもどった母グマ。かりゆうどにやられそうな子グマたちをたすけに行きました。ここでわたしがすごいと思

ったのは、子グマだけをたすけて、かりゅうどにはなにもしなかったところ。今までなんどもやられていたのに子グマをたすけることができた。母グマは子グマとさっていきました。やっぱりわるいのは、かりゅうどです。クマたちもわたしたちと同じように一生けんめいに生きています。わるいことをしないクマのことはなにもしないで、そっとみまもるのがいいと思いました。そしてこの母グマの優しい気のある行動が、とてもかっこいいと思いました。わたしも大きくなったら、この母グマみたいなお母さんになりたいです。



#### 【講評】

この感想文を最初に読んだ印象は、文が読みやすく、感じたことがよく伝わってくるということです。まず、最初に物語のおおまかな紹介があります。その次に物語のあらすじを書きながら、所々に自分の感じたことを無理なく入れています。「春のにおいで目をさますクマは、とてもはながいいんだなと思いました。」などです。このようにあらすじを紹介しながら感想を織り込んでいく書き方がとてもいいと思います。また、子グマを助けた後に、「母グマがかりゅうどには何もしなかった所がすごい。」というところには、他の人とは違う穂乃さんならではの感じ方が表れていると思いました。最後のまとめでは、「クマも一生けんめい生きていますので、わるいことをしないクマは何もしないでそっと見守るのがいい。」というやさしい気持ちがよく伝わってきます。穂乃さんの素直な感じ方とわかりやすい構成が光る感想文になりました。

(中原 秀樹)

## 棕鳩十賞 (小学校5・6年の部)

「太郎とクロ」 理論社

飯田市立松尾小学校 6年

えづか  
江塚 ひかり

番頭のような私が

クロのようになれるのか？

この物語は少年の太郎とクロ、米屋の番頭と秋田犬が主な登場人物だ。太郎は兄弟がおらず、本当の弟のようにクロをかわいがる心優しい少年だ。クロはニューファンドランドという種類の大型犬にもかかわらず、大変優しい顔つきで気も優しく力持ちだ。一方米屋の番頭は自分の犬が一番強いと思っていて傲慢にしている。そして飼っている秋田犬は顔がするどくケンカ好きだ。

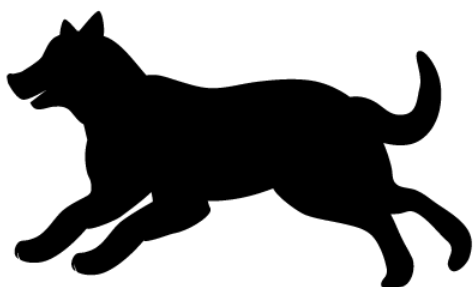
物語の中で番頭はクロに無理やりケンカをしかけたりするととてもいやな奴で、自分の犬が負けた時は誰も見ていないところでクロに仕返しをして大けがをさせるなど、読んでいても腹が立った。しかし、ふと自分はどうかだろうと考えた。私も弟に対して自分の方が背が高いからといってバ

カにしたり、年上だからといばっている。クラスで私より運動や勉強が得意な人を見ると、素直にほめる事ができないで、いじける事もある。私も番頭と大して変わらないのだろうか？

一方太郎とクロはどうだろう。無用な争いを好まず、いつもお互いの事を思いやっている。ある時は、大けがをさせた番頭にキバを見せて怒るクロだが、太郎はクロと番頭を仲直りさせてしまった。きつと太郎も番頭のやった事に腹が立ったと思う。だけど小さな村で暮らす以上、常に顔を合わせる事になる。番頭を許さなければ、ずっと気まずい思いをする。だから太郎は、二人を仲直りさせたのだと考える。

私は六年生になった。いつまでも番頭のような考え方ではだめだ。広い心で周囲の人に接し、許せる心を持つ人になれたらと思う。具体的には、相手の考えを尊重する。自分がされていやな事をしない、いわない。行動する前に一度考える。この私の夢を実現するのは簡単な事ではないと分かってい

る。私は前にも同じような事を考えて  
がんばろうと思った。結局続かずその  
たび、自分に失望した。だからこそ私  
が実現したい。そのために根気強く夢  
に向かって進んでいく。物語の最後で、  
クロが増水した川に落ちた村人を救  
っていた。しかも、人の命を救ったの  
は二回目だったので、新聞にのり、賞  
状とくん章をもらった。村の大人達は  
くん章をつけたクロを立派な犬だと  
思っていたが、クロは前も何も何も変  
わっていない。本当に立派な人は、そ  
の強さや優れた部分をひけらかす事  
はない。本当に必要な時にだけ、誰か  
のために使うのだとクロから学んだ。  
最後にもう一度。私は私の夢をかな  
らず、生涯をかけてでも、実現します。



#### 【講評】

ひかりさんは、物語の中に出てくる番頭が「とてもいやな奴で、腹が立った。」と述べています。しかし、自分のことを振り返って考えたときに、「私も番頭と大して変わらないのだろうか？」という疑問を持って物語を読み進めています。クロは大けがをさせた番頭にキバを見せて怒りますが、太郎の思いを受けて番頭を許しました。ここから、ひかりさんは「広い心で周囲の人に接し、許せる心を持つ人になれたらと思う。」と考えます。増水した川に落ちた村人を救って表彰されたときも、クロは以前と全く変わりませんでした。その姿からひかりさんは、「本当に立派な人は、その優れた部分をひけらかす事はない。本当に必要な時にだけ、誰かのために使うのだとクロから学んだ。」と感じ取ったことが素晴らしいと思います。「広い心で周囲の人に接し、許せる心を持つ人になる」というひかりさんの夢が、いつか実現することを願っています。

(中原 秀樹)

## 棕鳩十賞（中学校の部）

「チビザル兄弟」 ポプラ社

喬木村立喬木中学校 2年

まつしま きょうか  
松島 杏佳

### 仲間だから繋がる

「仲間」とは、どのようなものだろう。同じ志を持ち、協力し合う存在。趣味や好みが合い、一緒にいて楽しい間柄。などが挙げられる。私は、この物語をきっかけに、仲間について考えた。

この物語は、双子の猿の兄弟が、群れの仲間との対立などを乗り越え、支え合って成長する。また、世界中で進んでいる都市化によって奪われる自然環境の中、たくましく生き抜く強さを与えてくれる物語だ。

弟のチビザルが、狩人の箱ワナにかかってしまう場面。野犬が近づいて来ると群れのサルは引き揚げた。そのままそこに残れば、自分の身が危ないからだ。だが、兄のチビザルだけは違う。自分の安全を後回しにして、弟の閉じ込められた箱ワナを見つめていた。この場面から、兄弟の深い絆がみて取れる。生まれた時から、かた時も離れ離

れになった事がなかった兄弟にとって、急な別れに、お互いは強く寂しさを感じていただろう。

その後、弟のチビザルは、狩人の家のオリの中に入れられ、狩人の息子で十二歳の「三吉」という少年に出会った。始め、自分をこんな目に合わせた人間が憎らしかったが、徐々に心を開いていった。本文では「ふしぎなことがおこりはじめた」とあるが、弟のチビザルは、三吉の優しさや歌声が兄のチビザルの姿と重なるように感じて、三吉を慕うようになっていった。また、三吉を守るような行動もみせた。これは、仲間意識の現れであり、兄と強い絆で結ばれている弟だからこそその行動だった。人間と動物の関係にも関わらず、まるで兄弟のように想いが通じたのだ。これこそが、棕鳩十先生が描く、人間と動物の共存だと感じる。

三吉のおかげで、弟は山に戻り兄との再会を果たせた。狩人の家で暮らした三ヶ月の間に、チビザル兄弟達の山は変わり果てていた。木を切り出された

めに道を作ったり、静かだった山々が岩を崩す音でいっぱいだった。群れに戻ったものの、人間に飼われた事から仲間に認められず、兄とボスザルのタールだけが頼れる存在だった。この恩を弟のチビザルは深く心に刻み込んで、忘れなかった。

新たな餌場を探していた群れは、野犬に襲われてしまう。ボスザルは、先頭に立ち野犬を攻撃したが、足を噛まれてしまう。その時、兄弟は登っていた木から飛び降り、ボスザルを守るように動いたのだ。群れの中でこの行動をしたのは、チビザル兄弟だけだった。兄弟をいじめていた子ザル達も、その戦いぶりから兄弟を尊敬し始めた。私は、仲間を守るためだとはいえ、自分の身を危険にさらすこの行動は、誰もができることではないと思う。この状況で私と同じ行動ができただろうか。これは、チビザル兄弟の、仲間を大切に思う気持ちがとても強い証拠だと思ふ。その気持ちは、危険な状況を前に、二匹を動かすほどの大きなものだ。

った。兄弟は、最後まで、強い結束を深め、群れの仲間と支え合いながら、自然が奪われつつある厳しい島の中で生き抜いていくだろう。

「仲間」とは、どのようなものかをもう一度考えると、想像よりも遙かに深く、胸を打たれるものだった。今回の結末は、二匹のチビザル兄弟が仲間を思いやり助けようとした行動によって生まれている。その行動が、群れの仲間達の心を動かし、お互いの絆を深める事に繋がる。私が、この物語から学んだ「仲間」というものは、相手を思いやることで、更なる秘めた可能性へと繋がるもの。そして、心を大きく動かし合える存在だと思ふ。仲間を想う気持ちは、サルも人間も変わらない。私も、多くの仲間と支え合いながら、新たな可能性、将来を見出していきたい。

#### 【講評】

「「仲間」とは、どのようなものだろう。」と書き出した松島さんは、最後の段落で「「仲間」とは、どのようなものかをもう一度考えると、」と書いて感想のまとめに入っています。作品を読んで生まれてきた感動や共感や学んだことを、「仲間」をテーマにして書き進める、その一貫した書き方にまず素晴らしさを感じました。

そのまとめでは、兄のサル、三吉、ボスザル「タル」、いじめていた子ザルたち…そういう「仲間」たちとのエピソードから感じたことを踏まえて、「仲間を思いやり助けようとした行動」が「群れの仲間達の心を動かし、お互いの絆を深める事に繋がる」、「仲間」とは、「相手を思いやることで、更なる秘めた可能性へと繋がるもの」「心を大きく動かし合える存在」とまとめています。

「多くの仲間と支え合いながら、新たな可能性、将来を見出していきたい。」という結びに、中学校最後の学年に向かう松島さんの決意と、仲間に対する信頼感を感じて、温かな気持ちになりました。

(池上 幸治)

## 棕鳩十賞（一般の部）

「黄金の島」 ポプラ社

東京都中野区

びとう かつゆき  
尾藤 克之

### 『偶然を必然に変える力』

私は海底から浮かび上がる青年の姿を忘れることができない。左手のモリには黒い魚が突き刺さり、口にも一匹くわえたその野性的な姿は、この島で生きることの本質を象徴していた。大崎下島の物語は、人間の生命力がいかに強靱であるかを、静かに、しかし力強く語りかけてくる。

この作品で最も胸を打たれたのは「ゆうね」という言葉だった。台風で作物を失った農民たちが、朝と昼はわずかなソバ粥をすすり、夜は何も食べずに早く寝てしまう。「働かなくてもよいので、水だけ飲んで、何も食べず、すきつ腹をかかえて、日が暮れると同じ時に、早く寝てしまおう」という描写に、私は言葉を失った。

現代の私たちは、夜食を食べ過ぎて罪悪感を覚えることはあっても、空腹

で眠りにつくことの辛さを知らない。「ゆうね」という美しい響きの言葉の裏に隠された、生きることの過酷さ。それでも島の人々は生き抜いた。この事実の前では、現代人の悩みの多くが些細なものに思えてくる。

物語を貫く「偶然」というテーマも印象深い。参勤交代制度という政治的必要から生まれた船の往来が、小さな島を「黄金の島」に変える。そして鉄道の開通という技術進歩が、その栄華を一瞬で終わらせる。加島正人がアメリカ行きを諦めて島に残ったことで、日本初のミカン缶詰が生まれる。これらの「偶然」は、実は必然でもある。島の人々が常に準備を怠らず、機会が来た時に全力で取り組んだからこそ、偶然を幸運に変えることができたのだ。御手洗港に最初の小屋を建てた二人の農民の「頭のよさ」は、船が来るといふ情報を商機に変える洞察力だった。

私たちの人生も偶然の連続だ。しかし大切なのは、その偶然をどう受け止

め、どう活かすかということだろう。大崎下島の人々は、時代の波に翻弄されながらも、その都度最善の選択をし続けた。現代に生きる私たちも、変化を恐れるのではなく、変化の中にチャンスを見出す眼を養う必要がある。

料理屋の白い壁に残る少女の手の跡の話は、この物語の中で異質な怖さを持っていた。美しい女中が、おはぐろがうまくつかないことに腹を立て、熱湯を少女に飲ませて殺してしまおう。その時に壁についた手の跡が、何度塗り替えても浮かび上がってくる。

この挿話は、人間の残酷さと、歴史に刻まれた痛みの深さを象徴している。島の栄華の影で、こうした理不尽な暴力もあった。しかし同時に、この話が語り継がれていること自体が、島の人々の記憶と良心の証でもある。忘れてはいけない痛みを、島は静かに保存し続けている。

現代社会でも、成功の陰で犠牲になる人々がいる。私たちは輝かしい部分

だけでなく、影の部分も含めて歴史を受け止める必要がある。白い壁の手の跡は、そのことを静かに訴えかけている。

大崎下島の物語は、現代の地方創生にも重要な示唆を与えている。外部からの支援を待つのではなく、自分たちの手で新しい価値を創造していく姿勢。「わたり作り」から缶詰製造まで、常に時代に合わせて変化し続ける柔軟性。そして何より、どんな困難な状況でも諦めない精神力。

この小さな島の大きな物語は、私たちが忘れかけている「生きる力」の原点を思い出させてくれる。海底から浮かび上がる青年のように、私たちも困難の底から何度でも浮上し、新しい明日を掴んでいきたい。

#### 【講評】

「海底から浮かび上がる青年」の姿に着目した書き出しと書き終わりの呼応が、読み手に深い印象を残します。椋さんのこの作品から「生きることの本質」「生きる力の原点」を強く感じたことが伝わってきました。

そして、中のまとまりには、感動の中身が分かりやすく書かれています。生きることの過酷さを感じた「ゆうね」のこと、島民の姿から学んだこと―「時代の波に翻弄されながらも、その都度最善の選択をし続けた」「偶然をどう受け止め、どう活かすか」が大切だ―、さらに、料理屋の白い壁に残る少女の手の跡の話から感じたこと…尾藤さんがこの作品から受け取ったことが、説得力を持って、生き生きと表現されています。

まとめに挙げられた「新しい価値を創造していく姿勢」「柔軟性」「諦めない精神力」は、「生きる力」の原点であるとともに、尾藤さんご指摘のように「地域創生」の重要な視点だと思えます。そんな点にも教えられました。

(池上 幸治)

## 優秀賞（小学校1・2年の部）

「ゾウのたび」 あすなろ書房

東京都北区立都の北学園 2年

鈴木 美文  
すずき みふみ

### りっぱなリーダー

この本を読んで一ばんこころにのこったところは、年とったゾウがかりゆうどにおそいかかったところだ。森の中にかくれていたかりゆうどが、いく日もいく日もかけて水のあるぬまにやってきたゾウのむれをねらったのです。

やっと見つけたぬまには、つめたい水がたくさんあって、シラサギのむれもいて、ぬまのへりにはやわらかい草もはえていました。長くてつらいたびをしてきたゾウたちは、うれしくてうれしくて、しかたなかったと思います。水をたくさんのめて、草もたくさん食べられて、わたしはゾウたちがしあわせそうでもよかったと思います。そのとき、

ダン ダダダ ダン  
とあったので、わたしはびっくりしました。それはかりゆうどのてっぽうの

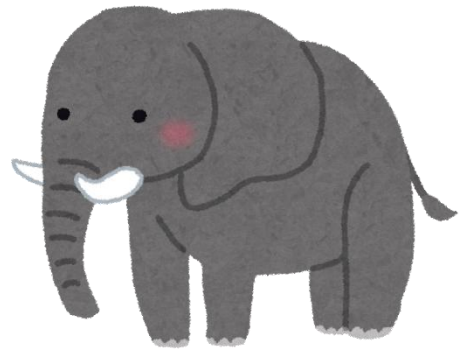
音でした。音にびっくりして、シラサギやほかのどうぶつたちはにげました。ゾウたちも年とったゾウのあいずでにげ出しました。にげ出したゾウをまもるために、年とったゾウはかりゆうどにとびかかりました。てっぽうにうたれても、がくりとひざをついても、なんども立ち上がってかりゆうどにおそいかかっていきました。

「なんでにげないの？にげて！」と、わたしは思いました。かりゆうどにとびかかるゾウは、つよくてかっこよくてすごいけれど、ころされてしまう前ににげてほしかったからです。でも年とったゾウは、「かりゆうどを止めないとなかまがやられる」、「みんながあんしんできるところまでにげられるようにがんばらないと」と考えてたかったのだと思います。

シラサギがとんで行く方こうをおぼえていて水のあるばしょをさがしたときも、歩けなくなつた大人のゾウを歩かせたときも、年とったゾウはむれのことを一ばんに考えていました。

りっぱなリーダーでした。だからなかも年とったゾウをしんじて、つらいたびをつづけられたのかなと思います。

この本を読んで、わたしはゾウたちから、なかまをまもることの大切さと、なかまをしんじることの大切さを教えてもらいました。年とったゾウはなかまのためにぎせいになってもどつてこなかったけれど、ゾウのむれはまたつぎのゾウが先頭に立ってたびをつづけます。つぎのゾウも、むれのためにがんばると思います。わたしもなかまにしんじてもらえて、なかまのためががんばれるリーダーになりたいなと思います。



#### 【講評】

美文さんは、「この本を読んで一ばんころにのこったところは、年とったゾウがかりゅうどにおそいかかったところですよ。」と、読んで一番感動した所から書き始めています。そして詳しく場面の様子を思い浮かべて自分の感想を素直に書いています。「長くてつらいたびをしてきたゾウたちはうれしくてうれしくて、しかたなかったと思います。」などは、本当にゾウの立場になって気持ちを想像しないと書けない感想です。年とったゾウがなんども立ち上がってかりゅうどにおそいかかっているクライマックスの場面では、「なんでにげないの？にげて！」と物語に深く入り込んで、そう思わずにはいられない心の声がかかれています。さらに、「かりゅうどを止めないとなかまがやられる」とゾウが考えていたことまで、豊かに想像を巡らせています。最後のまとめで、「年とったゾウはもどつてこなかったけれど、ゾウのむれはまたつぎのゾウが先頭に立ってたびをつづけます。」の箇所から、ゾウのむれのたくましさ、自然の豊かさを感じたことがよく伝わってきました。

(中原 秀樹)

## 優秀賞（小学校3・4年の部）

「藤吉じいとイノシシ」 理論社

喬木村立喬木第一小学校 4年

しのはら  
篠原  
そうた  
颯汰

しぜんと一緒に生きていく

藤吉じいさんに会いに行ったわたしが、藤吉じいさんとまごの一郎がイノシシとちよつとかわった出会いをした話を聞くというお話です。

このお話を読んで、ぼくが一番いしょうにのこったところは、イノシシのねぐらがすごいところだ。あなをほってくぼみを作りその上にかれ草をひき、屋根になるようにシノ竹とカヤを雨が入ってこないようになんじゅうにもならべて、さい後に落ち葉をふかぶかとのせてできているねぐらです。屋根ふきのしょく人さんみたくに上手にならべてあったり、大工さんのように上手に作ってあるというのを読んで、大きなイノシシがこんなにこまかい作業をするということに、おどろきました。人のように道具を使ったりしないで、どうやってこんなすごいねぐらを作ったのかすご

くきになりました。藤吉じいさんと一郎がのってもこわれないイノシシのねぐらを、ぼくも見たいと思いました。

イノシシが、藤吉じいさんのくしゃみでびっくりして出てきたところが、おもしろかったです。ぼくのおじいちゃんも大きなくしゃみをして、みんながびっくりすることがあるので、きつとそれと同じだと思いました。おどろかしてにげたイノシシたちを、もどってくるまでまっであげる二人がやさしいなと思いました。ぼくなら二時間もまてないけれど、二時間もまっていたからかわいい赤んぼうのイノシシを一郎にみせれて、藤吉じいさんもうれしかったのかなと思いました。

このお話には、山のしぜんがきれいなことや、山でくらす動物たちのしぜんのままのすがたがたくさん出てきます。かわいた落ち葉からする太陽のにおいってどんなだろうとか、ほんとの土のにおいってどんなにおいがするんだらうとか、林が金色になり、金

まき絵の中の世界のような景色って  
どう見えるんだろうと、わくわくしな  
がら読みました。山にいる動物たちの  
様子も、動物園にいる動物たちとちが  
って生き生きとしています。しぜん  
の中で自分でえさをとり、自分で命を守  
り、自分の力で生きている者に

「かみさまがおつくりになったまま  
のすがたで生きているやつは、なん  
だって、すばらしいのよ。」

という藤吉じいさんの言葉が、すごく  
かっこよかったです。

ぼくも、町にすむ一郎よりは、山や  
しぜんがたくさんあるところに住ん  
でいます。でも、知らないことがたく  
さんあるんだと、この話を読んで思  
いました。しぜんと一緒に生きていく  
ということは、すごいことだと思いま  
した。



#### 【講評】

このお話は、藤吉じいさんが語る山国の生活の知恵や良さ、自然の美しさや素晴らしさについて描かれています。颯汰さんは、この話で一番印象に残ったこととして、雨が落ちてこないように工夫して作ったイノシシのねぐらをあげています。「どうやってこんなすごいねぐらを作ったのかすごくきになりました。」と大きなイノシシがこまかい作業をする姿を豊かに想像しています。また、颯汰さんは、話の中に出てくる山の自然の美しさを取り上げました。「かわいた落ち葉からする太陽のにおい」「林が金色になり、金まき絵の中の世界のような景色」など五感をフルに使って、自然の素晴らしさを感じ取っています。藤吉じいさんが言った「かみさまがおつくりになったままのすがたで生きていくやつは、なんだって、すばらしいのよ。」という言葉に「すごくかっこよかった。」と感じていることから、この作品で作者が伝えたいことを充分読み深められたと思います。颯汰さんにとって、自然を見つめ直す良い機会になりましたね。

(中原 秀樹)

## 優秀賞（小学校 5・6 年の部）

「栗野岳の主」 ポプラ社

東京都北区立都の北学園 5年

すずき しもん  
鈴木 紫文

### 力強い生命力と使命感

主人公は栗野岳の深い原生林に住み、「栗野岳の主」と呼ばれている大きなオスイノシシです。ふつうのイノシシの倍以上の大きさで、子どももいる一家の主でもあります。十数年の間、狩人と猟犬を敵にまわしても生き抜いてきた主は、経験と知恵を活かして一家を守っていて、読んでいるだけで強い生命力を感じさせるイノシシでした。一家を全滅させないように戦ってきたからこそ、自然と身についた力なんだろうなと僕は思いました。

そんな一家を今までにない危機が襲います。大群の犬が一家に近づいてきたのです。うりぼうが四匹もいるのに主はどうするんだろうと思いましたが、主の大きな鼻息から、決して諦めないで「犬たちと戦ってやろう」、「この危機をどうやって乗り越えようか」と考えているような力強さを感じて、安心しました。

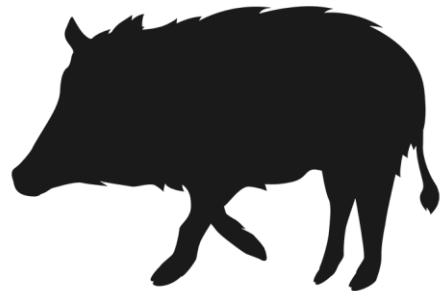
逃げる方向も主はわざわざ犬のにおいのする方向を選びました。ふつうのイノシシならにおいのしない方向へと慌てて逃げるのに、「においのしない方向こそっとも危険だ」と、こんな危機的な状況でも冷静な判断ができる主に驚きました。そして、これが生き抜いてきた理由なんだと僕は納得しました。

家族をほら穴においこむと、主は家族を守るために穴から離れました。僕は一家の主としての責任をこの野生のイノシシはわかっているんだと知って感動し、主が一番危険な南の谷間へと向かったときには、家族のために主が犠牲になろうとしているんだと考えました。犬どもにかみつかれ、崖ぶちの方においつめられ、前方には狩人が待ち構えているという最悪の場面では、主もいよいよここまでかと僕は諦めました。しかし主は「か八か、最後の手段に出ます。「猪突猛進」というこの勇敢な戦法に僕は胸がドキドキし、主が狩人から身を守ったとき

には、「よし！」と思いましたが。そして主は犠牲になろうとしたわけではなく、生き延びるための方法を考えていたんだと気づき、はっとしました。

しかし、主はそのまま深い谷底へ転げ落ちてしまいました。僕はさすがの主も死んでしまったと残念に思いましたが、実は主は生きていて、傷をうけた重い体を引きずって巣に帰り始めたのです。その姿から、主の「早く家族の元に戻らなくては」という使命感と、「犬どもに勝ったぞ」という誇らしい気持ちを僕は受け取りました。そして巣に戻ってからも、主が何もなかったかのように冬に向けて食べ物の心配をするところに感心しました。

「栗野岳の主」の勇敢な姿、家族への責任感、人間に負けない賢さを通して、僕は「種族をまもる本能」の凄さを知りました。また、強くなくて生き抜けないという自然の厳しさも教えられました。僕も主のように大切なものを守る強さを身につけたいと思います。



#### 【講評】

紫文さんの感想文は題にあるように、「力強い生命力」と「使命感」という視点を通して読み深められています。「栗野岳の主」が大群の犬に囲まれても、決してあきらめない姿から「どうやってこの危機を乗り越えようか」と考える力強さを感じています。そして、危機的な状況でもわざわざおいのする方向を選ぶという冷静な判断ができることが生き抜いてきた理由だと納得します。「家族をほら穴においこむと、主は家族を守るために穴から離れました。」という行動から、「一家の主としての責任をこの野性のイノシシはわかっている」とイノシシの行動の意図を読み深めています。崖ぶちに追いつめられたイノシシは狩人に向かって突進し、そのまま谷底に落ちてしまいます。紫文さんは主が重い体を引きずって巣に帰り始めた姿に「早く家族の元に戻らなくては」という使命感を感じ取りました。これから自然や生き物を見つめるまなざしが変わってきそうですね。

(中原 秀樹)

## 優秀賞（中学校の部）

「王者の座」 ポプラ社

喬木村立喬木中学校 2年

しもおか ゆうか  
下岡 優佳

### 「王者ナチと自然の厳しさ」

「きずついたナチは、岩の上になすわって、じぶんのもとからさっていく、野犬の群れを、じつと見つめていました。」この一文は、野犬の王者であった、シエパードのナチのもとから、ナチとの戦いに勝ち新しく王者になった野犬の方へ、他の野犬たちがついていく様子を表している文です。私はこの文章を読んで、ナチは今まで自分についてきてくれていた野犬たちが、急に自分の下からいなくなってしまう、王者ではなくなったことを実感するとともに寂しい思いを感じたのだらうと思います。また、野犬たちに殺されそうになったこと、野犬と勝負をして野犬の群れの王者にのぼりつめたこと、若い黒犬に王者の座をゆずったことなど今までの生涯を走馬灯のように思い出していたのではないかと思います。この物語から野生で生きて

いく動物の世界の過酷さを思い知らされました。他にもこの物語には、たくさんの自然の厳しさに立ち向かうナチの姿が描写されています。私はこの物語を読んで思ったこと、感動したことが二つあります。

一つ目は、兵隊たちに育てられ、兵舎ぐらしをしていたときに、いきなり兵隊たちに島に置き去りにされても、自分たちの力で食べ物を探し、野生で生きていく術を見つけていったシエパードたちの姿です。自分で食料を探すことができない犬もいましたが、他の犬よりも体が大きく利口であるナチは、野犬の群れに襲われたり、人間が用意した毒入りの肉を食べてしまったりしても、それらは危険なものであると瞬時に理解し、学んでいきました。犬は人間と同じくらい学ぶ能力があり賢いことを知り、更に私は犬が好きになりました。私もナチのように、その時の状況や環境に対応して、きちんと理解し、どのような環境でも生きることができるとなりたいと思

ました。また、兵隊たちに鍛えられてきた運動能力が、シェパードたちが野生で生きることにとっても大きな影響を与えていて、やはり日頃から自分の能力を鍛えておくことは大切だということ、この場面を見て思いました。

二つ目は、ナチが野犬の群れの王者であったとき、勝負を仕掛けてきた若い黒犬を、手負いの状態であつても、野犬の王者として戦いを受けて立つたことです。この姿を見て、ナチの勇敢さを改めて感じました。私がナチの立場だったら、イノシシと戦い体を傷つけられた後に王者の座をかけた戦いを挑まれても、ナチのようにあそこまで勇敢に全力で戦えません。自分もできる限りの全力を出して戦いたいとは思いますが、きつと心で「私はいう負ける。」と思つてしまい、すぐに戦いに倒れてしまふと思ひます。自分より若い犬の挑戦を正々堂々と受け、王者らしく威厳を保ち、全力でその犬と戦うナチの姿にはとても感動しました。私も気持ちを強く持ち、どんな

に苦しい状況におかれても、ナチのように全力で物事に立ち向かつていくように頑張りたいと思ひます。

この物語を読んで、私は野生で生きる動物たちを見る目が今までと変わりました。椋鳩十先生などの作家さんの、動物について描かれた物語は他にも読んだことがあります、人間に育てられた後に、自然の中でさまざまなお話を学びながら生きていくという物語は読んだことがなかつたので、新たな視点から動物の厳しき、賢き、素晴らしいさを学ぶことができました。私もこれからは、野生で生きる動物を見かけたら、その動物は野生でどのように生きているんだろうと想像をふくらませて、更に動物への親しみをもちたいと思ひます。



#### 【講評】

「きずついたナチは、岩の上にすわつて…」という最後の場面の一文を取り上げて、ナチの心情を想像している冒頭の段落がとてもいいと思ひました。作家は作品の書き出しと書き終わりに大変なエネルギーを費やそうですが、下岡さんの注目した一文にも、椋さんの思いや工夫が詰まっていると思ふからです。

そのあと、「感動したこと」として、まず「ナチの学習能力や適応力の高さ」を挙げます。次に、「王者としての威厳を保ち、正々堂々と最後まで全力で戦う姿の素晴らしい」を挙げています。この二つ目の部分は特によく書けていて、下岡さんの感動がびしびしと伝わってきました。

まとめの段落や感想文の端々から、下岡さんがこれまで椋作品を複数読んできたこと、そこから様々に学んできたこと、そして、下岡さんご自身が犬や動物がとても好きだということが伝わってきました。これからも動物を愛し、また、椋さんの作品を読み続けてください。

(池上 幸治)

## 優秀賞（一般の部）

「黄金の島」 ポプラ社

栃木県宇都宮市

にしその  
西園 にかこ  
多佳子

### 島に生きる

私は離島が好きだ。だから多くの離島を巡った。足を踏み入れるのが困難だからこそ、美しい自然が残っており、独自の文化も生まれる。そして離島に行くと、何物にも支配されない解放された気分になる。実際瀬戸内海の小豆島を訪れた時、そうだった。青い空、青い海、素麺工場や醤油工場、オリ―ブが育つ美しい島。

しかし、この本を読んで、離島の人々には計り知れない苦労があることを知った。何物にも支配されないどころか、大崎下島は、政治や経済に翻弄され、栄枯盛衰を繰り返してきた。しかし、それにも負けず知恵を働かせて力強く生きてきた島の人々に、驚かされ、励まされる。

「大崎下島の早仕事」と言う言葉があるように、島の人々はわたり作りでその昔、手漕ぎの船を使って長時間船を漕ぎ、近くの島に渡った。もうそれ

だけで体力が尽きてしまうことだろう。しかし休む時間も惜しみ畑を切り開いた。小さな島で生きるためには多くの知恵や工夫・努力が必要だ。自分の手で一つ一つ土地を切り開いていく作業には、どれだけの忍耐強さが必要であっただろう。何本かの細い木を切り倒し、それを大木の周りに積み上げ火を点ける。それから土地を耕して石を積んで畑を作る。想像しただけでも果てしない作業。それを一人で行うのだ。島に放たれた火は、鬼火のようだったとの言い伝えもあるという。

人々の怨念も籠っていたことだろう。交通の要として、また密貿易の場として御手洗が栄えたのは、徳川時代。穏やかな潮待ちの港と島と言う閉鎖された空間が重宝された。女中だけで五十人もいたと言うお屋敷は隆盛を極めた。贅沢にも屋久杉を使った屋敷だと言うから、かなりのものだ。はるばる南の島から大きな杉の木をどのように運んだのかも大変興味深い。幕末の志士坂本龍馬も島で討幕の相談

をしたと言う。その頃の島は確かに、黄金の島だったはずだ。

その後村長秋光八郎の案で青江ミカンを育て、島が豊かになったのも、この島で生きる術を見つけた素晴らしい村長と二人の若者の努力によるものだろう。そして日本産レモンを育て、日本の八割の生産にこぎつけたのも、挑戦することを忘れなかったからだ。黄金色のミカンが実る島はさぞ美しかったことだろう。そんな素晴らしい挑戦も、政府の「適地適産」の掛け声とともに、あっけなく幕を閉じる。

加島正人によるミカンの缶詰にも驚かされた。学識もない加島が不屈の精神で苛性ソーダによるミカンの缶詰作りに成功したのは見事と言う他ない。島に生きる者は、挑戦し続ける魂が宿っているのだろうか。普通はあきらめてしまいそうなのなのに、失敗を恐れず挑み続け、成功までこぎつけたのは奇跡と言う他ない。

しかしそれも戦争に翻弄され、アルコール工場に切り替えざるを得なか

った。戦争が終わってからは、塩を作った島の人々に配ったと言うのも、加島と同様、加島も時代に翻弄された。そして明治以降は黄金の島が地獄の島になったと言う。

離島は、何物にも支配されないと云うのは大きな間違いだった。小さな島であればあるほど、政治や経済に翻弄される。しかしこの島の人々は生きる術を見つけ、いつもあきらめなかった。

私はこの本で初めて大崎下島を知った。今も江戸時代からの町家や商人の屋敷が残り、風光明媚な観光地になっていると言う。いつか私も島を訪れ、黄金の島となった昔に、そして休みなく知恵を働かせて生きた島の人々に思いを馳せたい。

「人間は逆境であればあるほど強くなる」  
きっとミカンの木が茂る段々畑を歩けば、島に生きた人々の強さを感じ取ることが出来るだろう。



#### 【講評】

政治や経済に翻弄されながらも、「それに負けず知恵を働かせて力強く生きてきた島の人々に、驚かされ、励まされる。」西園さんは前段でそういう結論を述べます。そして、そういう結論に至った理由を述べていきます。わたり作りの苦勞、港町としての繁栄と衰退、青江ミカンの盛衰、加島正人の波瀾万丈の人生…物語を丁寧に読み、感動を整理して書かれた文章は大変読みやすく、説得力がありました。大崎下島とそこに生きた人々に思いを馳せた結びも素敵でした。

「離島は、何物にも支配されないと云うのは大きな間違いだった」—離島が好きで、多くの離島を巡った西園さんが、その中で形成されてきた印象を、棕作品を読んだことで変容させたというところにも、大変惹かれました。読書には、認識を改めたり、深めたり、自分のイメージを再構築したりする力があること、さらに、読書が新しい世界を開くことにつながることを、改めて教えられた気がします。(池上 幸治)